

2. ^{アクレディテーション}基準認定の意味と役割 米国の大学評価事業に参加して（講演全文）

日米における大学評価の課題

今日は、第10回の私学高等教育研究所の公開研究会にお集まりいただきまして、たいへんありがとうございます。かねてより、私どもの私学高等教育研究所では、私学の特性に配慮した大学評価システムのありかたについての研究を日本私立大学協会から委嘱されております。したがって、私どもの研究課題の最重要な課題のひとつといたしまして、大学評価システムの比較研究を2年近くおこなってきました。その一環として今日、その成果の一部をご報告いたします。特に、米国調査団によるアメリカの大学評価のあり方と実態についての質疑報告をさせていただきます。

日本ではすでに、アメリカの有力な大学評価システムのひとつであるアクレディテーションを古くから導入した経験がございます。それは、財団法人大学基準協会において、今も引き継がれております。それと同時に、今日、国立大学に対して、大学評価を行う大学評価・学位授与機構というものが設置されまして、わたくしは4日前に（2002年3月23日）にアメリカから帰ったばかりなのですが、その日に大学評価機構の第1回の国立大学の評価の結果が公表されたと新聞に載っておりました。そういうことで、国立大学では既に大学評価の実施が始まっているわけでございます。

その他に日本では、日本私立短期大学協会が短期大学基準協会をつくりまして、短期大学の評価をおこなおうとしております。私どもの日本私立大学協会は、すでに310校の加盟校をもっているわけですが、その評価システムはまだこれからの課題でございまして、私どもはその重要な課題をお手伝いするために、今まで評価研究をおこなってきたわけでございます。私も十数年以前からアメリカのアクレディテーションの調査研究に関心をもってきておりまして、実は今日、ご報告する大学基準協会の実地評価団に、1980年代の終わりごろにオブザーバーとして参加させていただいたことがございます。その時の印象が非常に強烈でございまして、今回も、ぜひその実地評価団のオブザーバーにさせていただきたいということ、かねてからニューイングランド基準協会（NEASC）（1896年

に設立した基準協会で、100年以上の伝統をもつアメリカで最も古い基準協会)のチャールズ・クック大学評価部長に、いろいろと便宜を計らっていただきまして、今回の実地評価の参加が可能になったわけでございます。

それで、このたび配布資料の中に米国大学評価調査団訪問先リストというのがあって、ここで書かれております基準協会、大学、その他を訪問して参りました。それで、ここでは評価およびア Krediteーションの課題にだけ限って、ご報告申し上げますと、アメリカにはご承知のようにア Krediteーションという機関は、6つの地域に分かれて存在いたしております。一番古いのが、今申し上げましたニューイングランド基準協会。あそこでは一番古い大学が成立したわけでございますから、基準協会も最も古いのはある意味で当然でございます。それで、これをニューイングランド・アソシエーション・オブ・スクール・アンド・カレッジズ (New England association of school and colleges) というふうに呼びます。なぜスクールがはいっているかといいますと、最初、この基準協会ができたときは、高校のレベルです。高校生が大学に入るときに、果たして大学で受け入れるだけの資格能力をもっているかどうか、それをはっきりさせなければいけない、ということからはじまったわけで、スクールとカレッジというふうになっているわけでございます。もうひとつの基準協会では、ウエスタン・アソシエーション・オブ・スクール・アンド・カレッジ (Western Association of Schools and Colleges) を訪問しました。これはオークランド、カリフォルニアバークレーのすぐ隣の町にございまして、ここも訪問して参りましたが、今日はここでの報告は割愛させていただきます。

基準協会でのワークショップを受ける

ニューイングランド基準協会に参りまして、そこでまず研修会(ワークショップ)を開いていただきました。それは、これから実地評価をうける大学、これがウエスタンニューイングランドカレッジ (Western New England College) という大学でございまして、セルフスタディを担当した女性の教授の方がおいでになりまして、そして、我々の大学ではセルフスタディをどういうふうにしたか、これからどういうかたちで評価団を受け入れる

か、ということについて詳しく説明をしてくださいました。と同時に、そういう方がいられているということは、これからわれわれが実地評価団として、オブザーバーとして参加する際のいわば紹介といえますか、どういう何者がですね、その大学に訪問するかということをおあらかじめ知っていただけておく、そういう機会になるわけでございます。それから同時に、すでに実地調査を受けた大学、それから、その民間のアソシエーションを受けて、一定の評価に関係していらっしゃる方々、5～6人の方々とミーティング、ディスカッションをいたしました。そして、なぜ日本ではそういう評価の問題に関心をもっているのか、なぜアメリカに学びにきたのかということをお、わたくしが現在の状況を交えてご説明をしたわけでありませう。

配布資料の通り、大学訪問には、2班に分かれました。1班はですね、今申し上げましたようにニューイングランド基準協会の調査をオブザーバーとして参加する。それから、もう2人は、我々ですが、これはすでに実地評価を受けた、あるいはセルフスタディをすでに実施してアクレディットされた大学、これがバブソンカレッジ (Babson College)、ボストンカレッジ (Boston College)、ウースターポリテクニクインスティテュート (Worcester Polytechnic Institute)、それからノースイースタンユニバーシティ (Northeastern University)、それからウエントワースインスティテュート・オブ・テクノロジー (Wentworth Institute of technology)、こういう大学を連日訪問いたしました。

実地評価団参加の体験

実はわたくしの経験から、これはもう11～12年前になるわけでございますが、日本でもいわゆる外部評価団の一員として訪問したことがあるわけですが、それと比べますともう雲泥の違いでありまして、日本ですと大抵半日くらい行って、それで、あまり差し障りのないことを言ってですね、まあまあということで帰ってくればそれで済むことが多いのですが、もう、アメリカはとてもしういうふうにはいきません。だいたい全部マニュアルで決まっていますけど、3泊4日で、これは鋤柄、羽田両氏がつぶさに経験されまして、私の経験のときとほとんど同じだと思いますが、朝の9時から夕方5時まで学内中を駆

け回る。いろんな人とインタビューをする。そして、アポイントメントが次々決まっております。それで帰ってくると、ホテルで食事が終わった後に、延々と夜中までディスカッション。そしてまた、翌日、というふうに同じような日程で、3泊4日ぎっしりやります。私はただオブザーバーですから、ただ聞いているだけでいいのですが、それでも疲労困憊いたしました。日本に帰ってきたら体重がすっかり減ってしまいました。これはまったく、誇張でもなんでもございません。ただ、その経験を受けて、初めてですね、アメリカのアクレディテーションというのはこういう構造になっているのか、それから、なんでこんなことでこんなに一生懸命に、アメリカの大学というのはやっているか、いったい、その背後にあるスピリッツというのはいったい何だろう、ということについて体験的にじっくりと学ばせていただきました。

実は今回もわたくしは、実地訪問に参加させていただきたかったんですけども、あちらではですね、オブザーバーは2人までにしてくれ、ということでございまして、それでは日本ではですね、そういう体験をされる方は少しでも多いほうがいいわけございまして、もう一つは、本音をいいますと、あんなしんどい体験は一度だけでたくさんでして、年もとりましたし、とてももたないということもございまして、羽田、鋤柄両氏に託して実地評価団には加わりませんでした。その経験は生々しく、これからお二人に報告していただくことになっております。他方、わたくしどもは、このバプソンカレッジやボストンカレッジの4校の大学で、どのようにアクレディテーションを受けたか、何のためにセルフスタディをやったか、どんなセルフスタディをやったか、それから、それはその後、その大学でどうかたちでメリットがあり、どうかたちで効果があり、あるいは、デメリットがあったか、そういうことについて、それぞれの大学で事情をうかがって参りました。お会いしたほとんどの方々は、そのセルフスタディ等に参加した、または評価に携わった方々ばかりであります。

で、レジユメの図表1というところがございしますが(「大学評価を構成する要素」)アクレディテーションっていうのは何か、何を目的にしているか、ということに関してだけ、ちょっと申し上げますと、アクレディテーションというのは文字通りクレジットを与える、

ということでありまして、クレジットっていうのは何かというと、トラスト、信用とか、信頼、あるいは評判とか、あるいは単位の取得とかそういうふうなことを指すわけでございます。で、信用する、ア kredिटするというのは、信用する信任する、あるいは信任状を与えて派遣するという、そこからですね、高校の評価に基づいて大学に合格させる、さきほど申し上げましたように、ハイスクールとカレッジの間のクレジットをどうするかというのが、ア kredिटーションの始まりだというふうに申し上げました。そういう意味をもっているわけでございます。で、ア kredिटされたところは、正式に認可された基準合格の高校、大学というふうになるわけでございます。で、ア kredिटーションというのは、あくまでもですね、評価の目的というのは、これはクックさんが2つのことを言っておりましたが、一つは品質を保証する、つまり質の保証である。もう一つは、これはあまり日本では、強調されないのですが、実は、改革・改善への刺激を与える。リフォーム、セルフリフォームを刺激する。そういう2つが目的でございます。

評価の主体は誰か

それから、ア kredिटーションは誰がやるのかというと、これは、実はですね、一言で言ってしまうと、大学の質の評価や質を守ることを政府、ないしは外部者に渡さない、という精神。それでは、どうするのかというと、自分たちがやる。だから、あくまでもこれは自律性として、大学が自ら自分で評価をする。そして、それを改善につなげていく。で、その改善につなげていくことが弱ければ、必ず外部者から干渉を受けるし、介入を受ける。だから、その介入を受けないように、その信用を保証する、クレジットする。これが、評価の精神であります。したがって、基準協会はどういうふうにするかというと、大学が自ら自分で、自分のお金だけで作る。ですから、基準協会は、よその他の基準協会もほとんど同じでございますけれども、政府からの補助金というのは一切もらわない。いわゆる民間のファンデーションとか、そういうところからもらうということはありませんが、政府からは一切もらわない。ここでやっぱりインディペンデンスを守るということで、そうしますと、誰が出すかというと、学校が全部会費でまかなう、ということになっており

ます。会費をどうやってとるのかというと、だいたい学生数に応じていくらかと決まっております。そこから出す、こういうことになっております。

それから、評価の方式は、まずセルフスタディをやります。セルフスタディというのは、自分で自分のことを検証する、診断する。それと同時にそこで第三者評価、つまり、セルフスタディというのは自分で自分のことを評価するインサイダーの評価ですからどうしてもフェアネス（公正性）に欠けるわけです。あるいは他者に対するリライアビリティ（信頼性）に欠ける。そのためには、アウトサイダーに評価してもらおう。そのときのアウトサイダーは誰かかというと、基準協会があくまでもそれは大学の団体、大学の代表者、あるいはピアグループ、ピアというふうに言います。これを他者ではなくて、大学自らが行う。とすると、大学自らが行うと、アクレディテーションで一番批判される場所は何かかというと、これはインサイダーの評価じゃないか、内輪同士の評価じゃないか、そういうふうにいわれることが一番の問題点である。そうしますと、いや、インサイダーだけでも、インサイダーの評価として決してこれはいい加減な評価じゃない、ということを示さなければならない。そのために、いろんな工夫をしてですね、その基準、外部評価を選ぶ人は基準協会が決める。だいたいニューイングランド基準協会には、500人くらいのキャンディデットがいます。そして、評価者ですが、評価者のなかから、この大学にはこういう人を、こういう地位を、だいたい10名くらいになりますが、その10名を選ぶ場合に、最初に団長（チェアマン）を選ぶ。この大学にこの団長さんでいいですか、ということを開きまして、クレームがつくと、違う団長さんを選ぶということをして、それから団長の後に、団員を決める。しかし、同じような大学から決してとらない。例えば、同じ州内の大学からの代表者は、その評価団に入れない。つまり、商売敵になりそうな人は選ばない。

セルフスタディが終わったら外部評価のチームが訪問しまして、それで3泊4日の、ものすごい苦行を行うわけでありまして、で、その時に団長も、団員もですね、お互いに評価しあう、そして、団長は団員を評価する、それから、もし日本みたいに当り障りのないこと言っていると、これはあの団長に非常に悪く評価されますし、それから、団長がいい加減な団長ですと、団員がまた悪い評価する。こういうふうに、その評価の結果は基準協会

に全部いくことになっています。コンフィデンシャルレターで、そういうかたちになっているわけでありませう。

設置認可とアクレディテーションとの関係

それから、もう一つ、どうしてもこれは申し上げておかなければいけないのは、日本の場合は設置認可で、設置認可をされれば、これまでは、再審査が行われず、ある意味では半永久的に大学でいられた、いられるわけです。ところが、アメリカの場合には、設置認可というのは一般的に日本の場合よりは許容的でありまして、州によってもいろいろ違うのですけれども、だいたい日本よりもはるかに緩やかになっているところが多いのですが、それは州政府がやるわけです。ところが、その州政府が設置認可を認めたということは、仮免的なもので、開業してよいというだけのことであって、本免とはみなされず、そこで出す学位は、バチェラーならバチェラーは、ほんとにそういう価値があるかということはまだ世間に認められることに至っていないのです。したがって、設置認可というのは、アメリカにおいて、あまり意味をもたない。むしろ、その後のアクレディテーションのほうが大変で、アクレディテーションをどうしても受けないとですね、ちゃんとした大学だというふうにはみなされず、したがって、アクレディテーションを受けざるを得ないということになるわけです。そのプロセスが、レジユメの図表2の「アメリカの大学設置認可と基準認定のプロセス」というところに書いてございます。

それから、次のレジユメ（「ウエントワース工科大学における機関別・専門別アクレディテーションの日程」）を見ていただきたいと思います。アクレディテーションというのは2種類ございまして、ひとつは、簡単に言うと、大学全体を認定する。これを、インスティテューショナル・アクレディテーションというふうに申します。あるいは、リージョナル・アクレディテーションともいいます。これはだいたい各地域の基準協会がやる。ところが、大学には、当然のことですが、工学部があり、医学部があり、薬学部があり、いろんな学部学科があります。そうしますと、その学部学科、専門分野を評価するという基準協会が、また別個にありまして、これがマトリックスみたいに、横断的、縦断的に評価の対象にさ

れるわけであります。例えば、法律だったらアメリカ法律協会、化学だったらアメリカ化学会、医学なら医学協会、日本でも、工学系のジャビー（JABEE：日本工学教育認定評議会）がございますが、そういうふうにして、実は、組織全体のアクレディテーションと専門分野別のアクレディテーションが重なってくるわけです。これをやっていると、大変忙しいわけで、これは一例ですけれども、ウエントワース工科大学では、ここにずっと予定が書いてありますけれども、だいたい2年にいっぺんくらいアクレディテーションを毎年受けているようなことになるわけです。これは、大変な作業であります。しかも、大変厳しい評価でありまして、で、こんなに忙しい評価をどうしてやっているのですか、ということをお聞きすると、これは必ずアメとムチがありまして、このアクレディテーションに合格しませんと、これは連邦政府が利用しているのですが、学生に対する連邦補助金、連邦奨学金ですね、これの需給資格がなくなってしまう。ですから、アクレディテーションを受けてないところの大学の学生は、奨学金の受給資格がありませんから、そんな大学へ行ってもしようがないということで、学生が来なくなる。それから、そこにいる先生は、連邦政府からの研究費をもらう資格がない。それにとどまらず、アクレディットされてないと、聞いたことのない大学にあの大学はアクレディットされているのか、されていないのかと、すぐいいますけれども、要するに、日本でいうと認可されてない大学というのと同じくらいの重みをもっているわけでありまして、そういう意味では、高校の先生はそんなアクレディットされていない大学には高校生の進学を推薦しない、あるいは、その卒業生は大学院に入学資格がない、あるいは、就職先はそんな学校の卒業生をとらない、というようなかたちの、いろんなペナルティがあるわけです。

そういうことで、かなりたいへんなプロセスをしながら、なおかつ、これが100年以上続けられているわけであります。

教育面重視の評価システム

あと、どうしても強調しておきたいことは、アクレディテーションというのは、実は、教育面の評価なのです。研究面を全然しないというわけではありませんけれども、実は、

教育に最重点をおいた評価なのです。なぜ教育に最重点をおいているかという、研究というのは学会があってですね、著者とか研究成果とか、いろんな評価の方法があります。ですから、これをやるところはいろいろある。それから、そもそも大学教員というのは、研究志向ですから、ほっといても研究のほうは、それほど、重点おかなくてもいい。しかし、教育はあえて計画的にやらないと、教育ということを改善することはなかなか難しい。そこで、教育評価に重点をおかれているのでございます。

それからアクレディテーションの評価は、適確か不適格のその2つしかありません。もちろん、中間的に、観察期間とか、あるいはもういっぺん再審査とか、そういうものはあるのですが、結果的には合か否しかない。しかも、優劣をつけない。グレードをつけない。ABC、とかですね。今度のあの大学評価機構は、グレードをつけないといいながら、あれはグレードをつけているんじゃないかと思えますし、少なくとも、新聞等はそういうかたちで報道していますが、アクレディテーションはそれをしない。なぜしないかという、アメリカにはランキングとかグレードをつける評価機関は、いくらでもあるわけですし、アクレディテーションは、これが自分たちの提示する基準に満たしているかどうかだけを評価の基本としているからなのであります。

それから、もう一つ重要なことは、評価の基準は、例えばハーバードとかですね、東京大学とかというのが最高のパリュウを持っていて、それと比べてここ低いか高いかという、そういう評価の仕方はしません。そうじゃなくて、小さい大学でも大きい大学でも、何を自分の教育目的にしているのか、その教育目的を達成するために、どれだけのカリキュラムをそろえ、どれだけの先生がいて、どういう評価をして、どういう効果をあげているのか、そういうことが基準であります。ですから、いい加減にミッションを書いていると大変なことになる。例えば、国際的に通用する人材を養成する、と大抵の大学は書いてありますけども、それならそういうカリキュラムどこにあるか、実際その国際的に活躍している国際公務員とか外交官をどれだけ養成しているのか、もし養成してなければ、それは詐欺である、というかたちで目的からくるわけです。決して固定化したレベルで評価するわけじゃない。レベルでやるのだったら、ハーバードがいつもトップであってですね、コミ

ユニティカレッジは、まったくそれとは価値観が違うという。そうじゃなくて、コミュニティカレッジはコミュニティカレッジのミッション、そのミッションをどう実行しているのかというのが評価の対象となる。

もう一つ付け加えておきますのは、現在の傾向としては、数量的指標をできるだけ使わないようにしている。例えば、ある学部学科に、本が何百冊あればそれで合格という、そういう書き方をしないようにしている。むしろ、そのミッションに照らして、それに必要な本があるかどうか、という考え方をします。だから数量がいくらあるかは、できるだけやめるようにしている。ですから、スタンダードを見ましても、数量はほとんど出てきません。昔、数量がずいぶんあったのですが、これをだんだん反省して数量をなくしています。

もう時間がないので、とりあえずここで、中途半端ですが、やめたいと思いますが、ただ、私どもは私大に関して、これだけ大変な作業をやる、なぜやるかということで、いろんな理由があるわけですが、そのなかで、やはりあの、こういうことに大学自らが必死になって取り組まないと、大学というのは、いつオートノミーを失うかわからない。それからいつ、大学というものの教育研究に直接携わって、その質の良し悪しっていうのを一番よく知っているはずの人間が評価から外される、そして外部評価にさらされる。そういうことに対しての、執拗なまでの防衛と言うのでしょうか、と同時に自分たちの大学は自分たちでよくする、同時にそれはできるのだ、という確信をアメリカの大学人はもっているように感じた次第でございます。